1970.6.25 明治大学新聞

「寮闘争を支持する」

稲垣副学生部長が自己批判

二十四日、生田寮の食堂で行なわれた寮生と稲垣勝生田地区担当副学生部長は、寮生の要望に応えて四条件白紙撤回、新寮闘争委員会を正式な代表者と認める、寮闘争の正当性を認めこれを全面的に支持するなどの確約書に署名、捺印した。これは大学当局にとっては〝造反〟的行為であり、また副学生部長という「地位」にありながら、これまで学生部が団交を拒み続けてきた新寮闘委を個人的にしろ認める発言をしたこと、などからして、当局内に少なからぬ波紋を呼び起こすものとみられる。

十七日、木下理事を追及し続け新寮闘委は、翌日抜き打ちのロック・アウトをくらい団交の申し込みは出せなかった。しかし当日生田の学生課へ出かけ、自宅にいた生田副学生部長である稲垣勝工学部教授に連絡をとり、昼ごろ会うことを約束。ところが、生田地区の正門まで足を運んだ稲垣副学生部長は正門守衛室に留まり、寮生の前に姿を現わさなかった。

寮生はその日午後五時まで待ちぼうけをくわされ、翌十九日にも学生課で副学生部長の居どころを捜したが、結局会えなかった。

そして二十四日、午後二時ごろ生田地区全共闘が開かれていた副学生部長に、田代雅春新寮闘委員長が、生田寮に来てくれるよう要請した。そしてその後まもなくして午後三時ごろ副学生部長は一人で生田寮におもむいた。

生田寮食堂で副学生部長をまじえた寮生二、三〇人が寮問題について意見を交換した。寮生の一人が「先生が(寮生の)主張を認めるならばそれを文書化し、署名してくれるか」という問いに「よろしい」と答えた。そして下書きはこれまで意見交換してきたものを要約して寮生がしたため、それを副学生部長が確め、改めて自分で文書化し捺印した。確約書の内容は次の通り(抜粋)。

稲垣副学生部長談　二十四日に生田寮におもむいたのも自発的行為だし、自己批判書を書いたのも自発的なものと考えてもらっていい。私はもう疲れた。

『自己批判ならびに学校当局に対する抗議文』

○水光熱費および電話基本料金を停止したことに対して私は何も知らなかった。上で一方的に決定したことに対して不満をもつ(なお文中の上は大学当局首脳部を指す)

○私の私生活保障のために、寮生はどうなってもよいという一貫した態度を寮生中と認め、全面的に自己批判する。

○私は当局に対してロボットでしかなかった。

○私は新寮闘争委員会と責任ある大学との団交を正当と認める。4条件白紙撤回し、退寮勧告を撤回し以上をもって、大学当局に対する抗議文ならびに自己批判し、寮闘争の正当性を全面的に支持し寮生と共に闘うことを宣言する。

この自己批判ならびに学校当局に対する抗議文は、私副学生部長である稲垣勝が自分の意志で書いたことを宣言し、ならびにロックアウト(6月18日〜23日)に対する全面的な抗議文とする

昭和45年6月24日

明大生田副学生部長

稲垣　勝㊞